

一九九一年度東北史学会 弘前大学国史研究会三十五周年記念

合同大会記事

一九九一年度東北史学会・弘前大学国史研究会三十五周年記念合同大会は、一九九一年十月五・六日の両日にわたり、弘前大学人文学部において、次のようなプログラムにより開催された。

第一日（十月五日 土曜日）

○公開講演（午後一時三十分～午後四時三十分） 於・弘前大学人文学部四〇四講義室

「現代ヨーロッパにおける民衆の生活と伝統」（スライド供覧）

静岡大学教授 三浦 弘万氏

「日本中世史の一視角―主従制について」

京都大学教授 上横手雅敬氏

○東北史学会総会（午後四時三十分より） 於・弘前大学人文学部四〇四講義室

○弘前大学国史研究会総会（午後四時三十分より） 於・弘前大学人文学部会議室

○懇親会（午後六時より） 於・ホテル法華クラブ弘前店

第二日（十月六日 日曜日）

研究発表（午前九時三十分より） 於・弘前大学人文学部

○日本原始・古代中世史部会 於・一〇七演習室

○日本近世近代史部会 於・一〇六演習室

○東洋史部会 於・一〇八演習室

○西洋史部会 於・一〇九演習室

※控室 人文学部学生控室

〔公開講演〕

現代ヨーロッパにおける民衆の生活と伝統 三浦弘万

氏は、実際に現地で生活された豊富な体験をもとに、御自身で撮影されたスライドを供覧しながら、民衆の生活と、そこに今も生きている長い伝統について、興味深く解説された。数千枚に及ぶスライドを巧みに整理されて、的確な場面を選び出して説明されたため、非常に分かりやすい講演であった。

日本中世史の一視角―主従制について 上横手雅敬

氏は日本中世政治史の第一人者である。当日は、御恩の二形態、御恩の諸段階、主従制と封建制などについて、過去の研究史を総括しながら氏の現在の立場を明快に説明された。



上横手雅敬京大教授

中世国家について、統一性を重視する黒田俊雄氏らの説と、複数国家説（東国国家論）をとる佐藤進一氏や網野善彦氏らの説を統合することの必要性、あるいは中世と近世とともに「封建制」という概念で括ることへの疑問などについて、興味深い発言が述べられた。

〔研究発表要旨〕

〈日本原始・古代中世史部会〉

亀ヶ岡式土器の成立過程について

東北大学 須藤 隆
東北大学大学院 関根 達人

東北大学考古学研究室では、縄文時代の東北地方において、先史集団の生業活動の在り方や、その物質文化、技術体系、そしてそれらをささえた集団相互あるいは内部の関係に、どのような共通性・独自性がある

のかを明らかにするため、東北中部北上川流域を対象として調査を進めてきた。ことに宮城県遠田郡田尻町中沢目貝塚・岩手県岩手郡玉山村前田遺跡の調査では、縄文時代後期末葉から晩期前葉にかけての豊富な資料をえ、該期の土器型式の変遷を捉えることができた。前田遺跡では、一九八八・八九年の第二・三次調査において後期最終末段階の竪穴住居跡一棟を完掘した。この床面および埋土出土資料に基づき、層位的に後期末から晩期前葉に到る土器群を抽出することができた。この分析では、遺物の出土位置をコンピューターに記録し、層位的知見と土器の接合関係に基づき、竪穴住居跡が埋没していくプロセスのなかで、その型式変遷を理解することができた。その結果、①竪穴住居跡床面・埋土四層出土土器群は、仙台湾周辺の「宮戸Ⅲb式」と共通する、②埋土3b・3c層出土土器群は、中沢目貝塚HⅠ-3区三・四次調査出土土器と共通し、晩期Ⅰ期古段階（「大洞B1式」を含む）に置かれ、「安行Ⅲa式」に併行する、③埋土1b・2層出土土器群は晩期Ⅰ期新段階（従来の「大洞B式」）に相当する、④埋土1a層から上層の3a層の資料は晩期Ⅱ期（中沢目Ⅱ群土器段階）に相当する、との結論を得た。

天平勝宝六年の遣唐使と五月一日経

宮城学院女子短期大学 大平 聡

私がかつて、隸体の「善光」朱印をおすことから「善光朱印経」の名で呼ばれ、その書写過程に関する詳細な奥書をもつことで有名な奈良朝

写経の遺品に関して考察したことがある。奥書に見える写経生・校正・装潢生は、正倉院文書に名を残す者がほとんどであること、善光という名の尼が法華寺寺主としてやはり正倉院文書に見えることから、善光朱印経の成立を正倉院文書中に見出せないかと考えたのである。

その結果、天平勝宝七歳（七五五）頃、法華寺の外嶋院を中心に、光明皇后発願のいわゆる「五月一日経」の校勘作業が、奈良の諸大寺を動員し、更には宮内の仏教施設において遂行せられた事実を明らかにした。そして、現存する五月一日経の中には、この校勘作業を示す重跋が記されるものが遺存しているのである。

この作業が善光朱印経成立の契機となったことは確かであるが、そのために行われたとは言いがたいと指摘する以上のことはできなかった。今回、この点を考えるため、そもそもこの校勘作業が、五月一日経を何と対校する作業であったかを明らかにすることから始めたのであるが、その結果、天平勝宝四年に出発し、同六年に帰国した遣唐使と、これに同行して来日した唐僧鑑真とが、重要な役割を果たしているのではないかという結論に達したので、このことを報告したいと思う。

『釈日本紀』（開題）の構成について

福島県立博物館 佐藤 洋 一

『釈日本紀』は、十三世紀後半に卜部兼方が著述した『日本書紀』全三十巻を対象にした注釈書である。卜部兼方の自筆原本は現存しないが、

最古の写本としては、正安三年（一三〇一）四年の奥書をもつ前田育徳会尊経閣文庫所蔵本がある。前田本は、巻ごとに一冊をなしており全二十八巻計二十八冊あり、これらに目録一冊が付属して合計二十九冊となっている。そして、全巻を「開題」・「注音」・「亂脱」・「帝王系図」・「述義」・「秘訓」・「和歌」の計七部門に分けて構成している。

『釈日本紀』のような典籍の注釈書の場合には、メッセージの重層性に留意しなければならない。すなわち、前田本成立時および以後の付加メッセージ（重書き・見せ消し・擦消しなどの訂正・改竄、訓点・校異・按文・貼紙などの書入れ）の検討を通して、前田本祖本の形状を推定し、かつ卜部兼方の自筆原本の記載状況を推定しなければならない。

今回の研究発表は、巻第一「開題」の構成に関して、前田本の記載状況の分析を基礎にして、兼方自筆『日本書紀』（神代巻）裏書の記載状況・『日本書紀私記』その他の引用状況の分析をも加味して考察する。併せて、従来看過されてきた『太平御覧』の利用状況を整理して、編纂史料論にも言及したい。

なお、右の「メッセージ」・「付加メッセージ」については、石上英一氏の「日本古代史料学の方法試論」（『東洋文化研究所紀要』第一〇六冊、一九八八年）によった。

得宗被官に関する一考察

——陸奥国曾我氏を中心に——

東北大学大学院 申 宗大

鎌倉得宗専制政権の研究は、次の二つの方向性を主として進められているようである。一は、各国別に北条一門領を含む得宗領を検出してゆく方法であり、二は、得宗被官を個別的に検討してゆく方法である。この二方向の研究は、主たる研究対象の力点が、若干相違するというだけで、本質的には、両方向の研究が相互に補い合わねばならない性質のものであるばかりではなく、相互に重複関係も成り立っているものである。鎌倉幕府の支配が進むうち、北条氏の勢力がのび、得宗専制の傾向が著しくなるとともに北条氏所領が全国的に拡大して行つた。得宗の政治的権力が強大化するにつれて、しだいに、その頭角をあらわしてきたのは、得宗に直属していた得宗被官層であつた。本報告は、得宗専制の経済的基盤となつた得宗領において、実際に在地支配を行なつていた得宗被官と得宗家との関係を、陸奥国津軽で活躍していた得宗被官の一人である曾我氏を中心として考察することにする。曾我氏が津軽において拠点としたのは、津軽三（四）郡の内津軽平賀郡である。曾我氏は、建保七年、曾我（平）広忠が北条義時の地頭代として平賀郡に入部して以来正平十六年までこの地域の在地領主として活躍することになる。なお、基本的な史料は『岩手県中世文書』上巻に拠つた。

御師と海運

——神船をめぐる——

東北大学大学院 綿貫 友子

伊勢・石清水・賀茂など諸社の神人のなかに海運を媒介に輸送・交易・漁撈を通じて神役奉仕を行う者が多数存在したことは従来の研究で明らかにされている。しかし、神人による海運経営の実態については解明が遅れ、多くの問題点が残されている。社領（御厨）からの貢納物輸送、或いは交易活動の具体面の検証は運輸・商業など業種の分化が確立していない中世の社会経済史を考えてゆくうえでも特に重要な課題といえるだろう。

本報告では諸社神人のなかでも伊勢内・外宮の御師を例に海運との関わりを検証するとともにその活動の実態を神役奉仕と交易の二面から十五世紀を中心に考えてみたい。その際に一つの手掛りとなるのが「神船」である。

「神船」は両宮へ朝夕御饌料を備進し、その代償に両宮から航海上の保障をうけた船であり、神役奉仕の側面が指摘できる。また、神船のなかには伊勢沿岸を本拠に遠隔地への航海を行う「大廻船」と伊勢海沿岸を航海する「小廻船」との「伊勢海大小廻船」が含まれており、交易とも深い関わりが認められるのである。御師はこの神船の船役を給分とし、彼らの海上活動も神船との関わりにおいて展開されたと考えられる。両宮ならびに幕府の引付類に記された神船に関する史料を中心に課題の解明に向けての基礎的作業として若干の考察を加えたい。

〈日本近世近代史部会〉

天正十年代の東国情勢をめぐる一考察

——下野皆川氏を中心に——

学習院大学大学院 高橋 博

本報告は、中近世移行期における関東諸大名（主に下野）の動向を素材に、天正十八年（一五九〇）の所謂「東国仕置」を画期とした、豊臣政権による大名編成のあり方を主題とするものであるが、特に小田原陣で北条方として一旦は改易され、代って関東に入市した徳川家康の附庸大名として存続を許された皆川広照（下野都賀郡皆川城主）に着目し、そこに至るまでの歴史的要因を捉えることで、現行の「惣無事令」論の一断面として、政治的な位置づけを試みる。

天正十八年四月、小田原城を脱走した皆川氏は豊田軍のもとへ助命を求め、これを許した秀吉は理由として、「（皆川氏が）先年御馬・太刀を者被納候者」であるからと諸大名へ通達し（「真田家文書」他）、身柄を家康に預けた。天正十年代急速に北条領国化した西下野において、皆川氏の本質が豊臣政権による没収領域から免れたのは、「先年御馬・太刀を者被納候者」として、豊臣の「惣無事」の論理を許容する姿勢であることを、秀吉が認識していたからであり、その政治操作には、天正十四年（一五八六）末より東国「取次」の任に当たっていた家康の存在が大きく、天正八年（一五八〇）以来継続していた皆川氏との個別的関係が家康の背後にあった。皆川氏にとって家康は、関東の枠組みにおける地

域的結合である「関東惣無事」（「皆川家文書」）の体现者でもあり、豊臣政権の関東知行割は、それらを反映するものであった。

仙台紅花商と上方商人

大阪商業大学 安藤 重雄

近世における代表的商品作物「四木三草」の中の「紅花」は、染色部門において、現在すでに「系統死」した産業の一つとなっている。

しかし幕藩体制期、最上地方では元禄年代すでに芭蕉の「奥の細道」紀行にも知られるごとく、鈴木清風に代表される「紅花大尽」が存在し、商業資本の利潤追及熱が高まり、紅花專業層が形成されていた。その後も「最上紅花」の寡占的な市場支配の状況が続く。幕藩体制中期に至り、市場に「仙台紅花」が新規参入。今田信一氏著の「最上紅花史の研究」に説く所では「最上紅花の品質不良は最後まで需要者の不評をかった」といった品質管理の不完全さをつき、仙台紅花は品質のよさで最上物を追いあげた。長谷川紅店などの最上の問屋が「南仙物」の本場村田地域の紅花商の系列化を策すると共に、遠く上方の豪商も、この新興生産地確保のために現地紅花集荷商の高橋屋忠助等と提携をはかる。その中には、文久年間尊攘激派の「天誅」の経済外的強制に脅かされた、布屋や丁子屋など当時の代表的対外貿易商なども存在した。丁子屋吟三郎は、著名な近江商人であるが、後発資本でよく先人を圧倒し、営業を拡大した。その強引な商法は、紅花取引の部門においても表れており、紅花

問屋仲間内での紛争を惹起している。彼らが何を企図し現地でいかに動いたか、ここに若干の検討を加えたい。

幕末における八戸藩と

薩摩グループの形成

八戸西高等学校 三 浦 忠 司

八戸藩は天保九年四月薩摩藩と養子縁組を行った。島津重豪一三男が八戸藩に入って、九代藩主南部信順と名乗った。重豪は娘を將軍の御台所に入れ、息子や娘を全国諸大名に縁組させて、下馬將軍と異名をとるほどの権勢を誇っていた。

薩摩藩のこのような縁組拡大策は、反面、八戸藩のような小大名を中央政界に押し上げるきつかけとなった。そして、これがまた、八戸藩を薩摩藩一門に加えることとなり、幕末から明治にかけての八戸藩の動向に大きな影響を与えた。

八戸藩の幕府の格式は、この縁組によって天保九年一〇月に沿岸警備の功として城主格に昇格、安政二年一二月に従四位下、侍従となり、大広間詰となつて一躍一〇万石並に栄達した。

一方、薩摩藩では、嘉永二年から三年にかけて「お由羅騒動」と呼ばれる内紛がおきており、藩主斉興と世子斉彬が対立していた。

この内紛を収拾させ、斉彬を藩主に就封させて阿部正弘政権へ登用させたのが、八戸藩主信順とその兄弟達であった。主席老中阿部は、外圧の危機的状況の中で、斉彬や宇和島藩主伊達宗城らとはかつて幕府雄藩

提携体制を確立する必要にせまられていた。

かくして、信順は、嘉永四年正月島津家の名代として斉彬の家督相続に成功した。これ以後、八戸藩は斉彬の動きに呼応して慶喜擁立から公武合体への道を歩むことになる。

安政三年・二つの奥巡の記

岩手大学 藤 原 暹

二つの奥巡の記とは、一つが八角宗律・高遠の「奥筋御巡見随行記」で、いま一つが漆戸直矢・茂樹の「奥巡の記」を指す。

史料として、前者はすでに紹介した通り（『岩手史学研究 七四』、故吉田孤羊蔵本、高橋捷夫・千田田鶴子翻刻本を、後者は岩手県立図書館蔵自筆本を対象とする）。

両者共に、安政三年丙辰四月廿四日盛岡出発、六月十一日帰着の南部四十代藩主利剛公の奥筋（野辺地―下北半島）巡見に同行した私的見聞記録である。

利剛公のこの巡見自体については諸書で叙述されているが、巡見の内容容についてはこれまで明確な公表がなかった。

本発表は八角が蘭医学者で、漆戸が国学者であった個人的な視点の差異に基づきながら、両者が記録した共通の事実の紹介をいくつかの点を中心に行うことを目的としている。

なお、この研究は平成三年度特定研究「岩手文化の総合的研究」の

藤原分担分の一部報告をも意味する。

福島県の民会について

桑折町史編纂室 田 島 昇

いわゆる「三新法」より以前、各地に生まれた地方議会である「民会」について旧福島県の例を検討するのが報告の内容である。

「民会」に関する古典的とも言える論文「明治初年の町村会」で福島正夫・徳田良治両氏が「町村会」と「県・区会」とを分けて、前者を町村民の代表＝総代の議会として位置づけ、後者を「民会の名に値しない」とされたのは一九三八年のことであった。以来多くの論者が「民会」に触れながらもこの論点は承認されて通説の位置を保っている。

ところで、徳田氏らが言われる「民会の名に値する」とは住民を代表する議員が選出される制度的保証がなされているかどうかと、住民の意思が民会に反映されているかどうかにかかっているように思われる。そして、住民の意思が反映しているかどうかは「民会」が地方行政体の行政とどのようにかかわっているかを検討されねばならないように思われる。しかし、多く論及される民会についての議論は、二・三の例外はあるものの、実証的検討がなされているようには見えない。

福島県での「民会」研究は第二次大戦以前の諸根氏の『福島県政治史』や『河野磐州伝』にはじまるが、自由民権運動活動家を育てた民会の研究は大きく進展していない。報告者の研究能力によって旧福島県を検

討の対象とするが、河野や有力な民権活動家を輩出した磐前県が一八七二年に民会を生んだ旧福島県より先行していたことはほぼ間違いないので、従来の研究は再検討されねばならないと考える。

旧福島県の民会は、すでに報告しているように、一八七二年に行われた大小区の区画改正を行ない「大区小区制度」を採用した際に誕生した。以来、断続的ではあるが県・区・村会議が開催され、制度的には一八七五年に区会議が整備され、翌年に至って旧福島・磐前・若松三県が合併して福島県が誕生するのにもなつて県会議が制度化されて「福島県民会規則」が成立する。

報告では一八七二年以降について述べるが、近世末期に各地で報告されている総代庄屋制にともなう諸会議（＝郡中議定）との関連も検討されねばならない。旧福島県の北部に位置する伊達郡の幕府直轄地では文久年間に従来の年番会所に集まる「会議」の体制への不信任があるし、棚倉領内では戊辰東北戦争に際して領属を決める会議が開催されて新政府支持が決定されている。これらとの関係は別に報告したいと思っている。